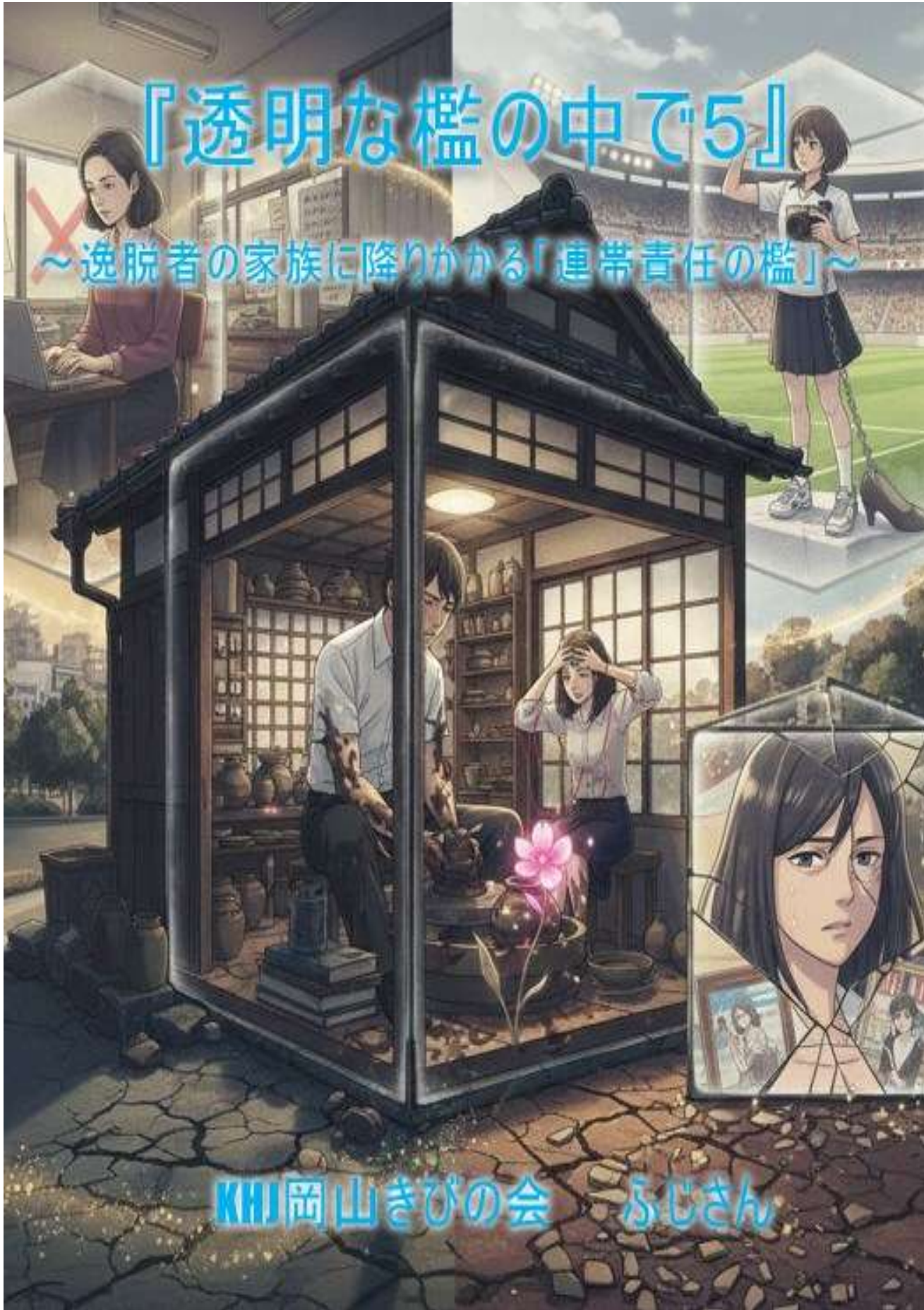


『透明な檻の中で5』

~逸脱者の家族に降りかかる「連帯責任の檻」~

KHI岡山きびの会 ふじさん



目 次

序 章：静寂の亀裂	2
第一章：三姉妹のオンライン葛藤と「三つの檻」	2
第二章：誠の自責と「泥」の再起	4
終 章：新しい絆と「土の音」の再定義	
1. 沈黙の共犯の檻の崩壊	5
2. 誠の新たな決意	6
3. 翠の決断と「居場所」の再定義	6
4. 灯りの詩	6
登場人物紹介	7
あとがき	8

『透明な檻の中で5』

～逸脱者の家族に降りかかる「連帯責任の檻」～

序章：静寂の亀裂

藤森光希は、今日も佐々木夫婦が営む陶芸工房『土の音』にいた。

工房を満たすのは、湿った土の匂いと、規則正しく響くろくろの回転音。父・佐々木誠は奥でろくろを回し、母・玲子は静かに編み物をしている。土の匂いと、焚き火のような温かさが混ざり合うこの場所は、光希にとって、社会の「沈黙の檻」から逃れ、自己の呼吸を取り戻す唯一の安全地帯だった。彼は、誠と玲子が世間の規範に背きながらも、静かな誇りをもって生きている姿に、深い共感を覚えていた。

「光希くん。今日は、いつになく穏やかな空気ね」

玲子が顔を上げ、優しく微笑む。この静寂は、佐々木夫婦が長年、地域からの偏見や陰口に耐えながら、必死に守り続けてきた「逸脱者の居場所」の平和だった。三人の娘たちが全員成人し、自分の選んだ相手と結婚して家を出ていった今、夫婦は、自分たちの人生の選択が間違いではなかったと、静かに納得し始めていた。

だが、その日の夕方、その静寂はガラガラと音を立てて崩れた。

三女の翠（みどり）が、大きなトランクを引きずりながら、工房の空き家部分の玄関に立っていた。

彼女の目は赤く腫れ、その瞳には光希がかつて自分自身の鏡に見たような、行き場のない怒りと絶望が渦巻いていた。

「ただいま……なんて、口が裂けても言えないわ」

翠は、そう言って工房を見回した。彼女は、三姉妹の中で唯一、両親の芸術やこの工房の雰囲気露骨に嫌悪していた。

「この家は、私たち家族が世間から隠れるための古い檻だと思っていたけど、まだ残っていたのね」

翠は、夫との関係に悩み、突然「避難」してきたのだった。玲子は驚き、誠はろくろを回す手を止めて振り返った。

「翠…どうしたんだ。何かあったのか？」誠の声は掠れていた。

翠は、誠と玲子の隣に立つ光希を冷たい視線で見た。

「光希さんでしたっけ。あなたは、ここで勝手に癒されているようだけど、ここは私のお父さんとお母さんの『逃げの居場所』みたいなものなのよ。私たち三姉妹が、この『逸脱者の檻』の中でどれだけ息苦しかったか、何も知らないくせに」

翠の言葉は、光希の心に強く突き刺さった。それは、彼自身がかつて、家族に対して抱いた「言葉にならない叫び」と同じものだった。翠の帰郷は、佐々木夫婦の「逸脱者の親の誇り」と、娘たちが背負ってきた「連帯責任の檻」という、家族内の最も深い亀裂を、再び呼び起こした。

第一章：三姉妹のオンライン葛藤と「三つの檻」

翠が帰省した夜、佐々木夫婦は久しぶりに静かに食卓を囲んでいたが、その空気は鉛のように重

かった。誠は、翠の言葉に打ちのめされ、自分の芸術を追求したことが、娘たちを世間の目に晒したのではないかという「家族の犠牲の檻」に囚われていた。玲子は、三姉妹それぞれの苦しみに気づきながら、夫の誠を支えるために見て見ぬふりをした「沈黙の共犯の檻」に、再び閉じ込められていた。

翌日、翠の帰郷を知った長女の茜（あかね）と次女の碧（あおい）から、オンラインビデオ通話が繋がった。画面越しに、三姉妹の激しい口論が始まった。

三姉妹のオンライン葛藤

「連帯責任の檻」の底で

翠（みどり）が実家の古いノートパソコンを開くと、画面が三分割され、東京にいる長女・茜（あかね）と、遠征先の海外にいる次女・碧（あおい）の顔が映し出された。

茜（長女）：（都会的な夜景をバックに、ワイングラスを置く音が響く）「……信じられない。翠、あんた正気？ 何があっても、あの家（うち）にだけは戻らないって、三人で約束したじゃない。あそこは、私たちの人生を呪う『泥の沼』なのよ」

翠（三女）：（薄暗い工房の自室で、震える声で）「お姉ちゃんには関係ないでしょ！ 私はもう、どこにも行くところがなかったの！ 夫にも『君の家は普通じゃない』って言われて……。結局、私もあの『逸脱者』の血からは逃げられなかったのよ！」

茜：（鼻で笑い、冷徹に）「『普通じゃない』？ 当たり前じゃない。お父さんとお母さんが世間を捨てて駆け落ちして、自分たちの芸術（エゴ）のためだけに私たちをあの村に閉じ込めた。そのせいで私が、就職活動のときに身辺調査でどれだけ惨めな思いをしたか、あんた忘れたの？ 私は今の地位を築くために、『佐々木』という名前を捨てるくらいの覚悟で生きてきたのよ。あんたがそこに戻ることは、私の努力をドロで汚すのと同じなの」

碧（次女）：（ホテルのベッドに腰掛け、苛立ったように髪をかき上げる）「二人とも、やめなよ。……茜姉ちゃんの言うこともわかるけどさ。でも私は、お父さんたちが『自由に生きろ』って言ってくれたから、この短い髪で、スポーツの世界で戦えてると思ってる。……でもね、翠」

翠：（画面を睨む）「何よ、碧姉ちゃんまで説教？」

碧：（声が少し震える）「説教じゃない。……でも、私のところにも届くんだよ。『あいつは親が駆け落ちして、勝手気ままに育てられたから、協調性がない』って。私がどれだけ努力して結果を出しても、最後には必ず『親の教育』に結びつけられる。私は、親が自由でいることの免罪符（めんざいふ）として、常に『完璧で強い人間』を演じ続けなきゃいけない。このプレッシャーが、どれだけ息苦しいか……。翠、あんたがそこに逃げ込んだら、また『やっぱりあの家の娘は堪え性がない』って言われるんだよ。私たちの『連帯責任』は、いつまで続くの？」

翠：（叫ぶように）「みんな勝手よ！ 茜姉ちゃんは東京で名前を隠して、碧姉ちゃんは海外でヒーローになって……。私だけが、あの村ですっと、お父さんの器を買いに来る客の『可哀想な娘を見る目』に晒され続けてきたの！ お母さんの編み物だってそう。あれは私を温めるためじゃなく、世間の冷たい目から隠すための『猿ぐつわ』だったのよ。私は、あのお父さんのろくろが回る音を聞くだけで、自分が泥の中に引きずり込まれて、形を変えられていくみたいで、吐き気がするの！」

茜：（沈黙の後、吐き捨てるように）「……勝手にしなさい。でも、お父さんのあの『独りよがりの表現』を、絶対に肯定しないで。あそこは、私たちが自分を殺して作った『透明な檻』なんだから」

画面の中の三人は、同じ両親を持ちながら、それぞれが別の形の「檻」の中で、孤独な戦いを続けていた。翠は無言でパソコンを閉じ、真っ暗な部屋に響く、階下からの微かな「ろくろの音」に、耳を塞いだ。

三姉妹の衝突は、佐々木夫婦が長年、沈黙の裏に隠してきた「逸脱者の家族に降りかかる連帯責任」という、最も深い痛みを可視化させた。

第二章：誠の自責と「泥」の再起

三姉妹の刺すような言葉が消えた後、工房『土の音』には、耐えがたいほどの静寂が横たわっていた。誠は、ろくろの前に立ち尽くしていた。数日前まで「誇り」の象徴だった完成間近の壺が、今はただ、娘たちの人生を啜（すす）って膨らんだ醜い化け物に見えた。

「これが、私の正体か……」

誠は、まだ湿り気を含んだ壺の縁（ふち）に指をかけた。かつては、指先に伝わる土の適度な弾力が、自分と世界を繋ぐ唯一の確かな手応えだった。しかし今、そのぬめりは、娘たちの涙の跡のように冷たく、粘りついて離れない。

誠は、力任せにその壺を「潰した」。グシャリ、という鈍い音。精緻に整えられた形が、一瞬で無惨な泥の塊へと戻る。土は抵抗するように誠の爪の間に潜り込み、皮膚を抉るように乾いていく。誠は狂ったように、工房に並び未焼成の作品を次々と床に叩きつけた。

飛び散る泥。砕ける土の破片。「表現など、呪いでしかない！ 家族を壊してまで作る価値のあるものなど、この世にありはしないんだ！」誠の叫びは、土埃の舞う工房に虚しく響いた。彼の掌（てのひら）は、土に含まれる細かな長石の粒で擦れ、赤く滲んでいた。その痛みすら、娘たちが味わってきた孤独に比べれば生ぬるいと感じていた。

そこへ、光希が静かに近づき、床に散らばった泥を一つ、拾い上げた。「誠さん……。土は、何度でもやり直せるんですよ」

その言葉に、誠の手が止まる。「光希くん。……私は、取り返しのつかないことをした。この泥は、もう、娘たちの目には『檻の格子』にしか見えないんだ」

「でも、僕には『防波堤』に見えました」光希は泥を誠の手に返した。「冷たくて、重くて、でも、これがあったから僕は今日まで流されずに済んだ。誠さんが傷つきながら捏ねたこの土がなければ、救われなかった人間が、目の前にいます」

誠は、自分の汚れた掌を見つめた。乾き始めた土が、皮膚の皺に沿って白くひび割れている。それは、彼が何十年も「表現」と共に生きてきた証でもあった。

誠は、再びろくろの前に座った。足元でペダルを踏み、回転を始める。シュルシュルと、虚空を切る音。彼はバケツの水に手を浸し、新しい粘土の塊をろくろの中央に据えた。

指先が土に触れた瞬間、激しい「冷たさ」が走る。しかし、中心を捉えるために力を入れると、今度は土の中に閉じ込められていた「熱」が、摩擦となって指腹（ゆびはら）に伝わってきた。遠心力に逆らい、土を上を引き上げる。指先に伝わるのは、以前のような「完璧な美」を求める傲慢な手応えではない。

もっと重く、もっと不器用な、「生」の抵抗だ。

土は、誠の迷いを吸い取っていく。娘たちの怒り、玲子の沈黙、光希の孤独。それらすべてを泥の中に練り込み、誠は再び、形を与えていく。ろくろから伝わる振動が、誠の腕を伝わり、心臓の鼓動と重なった。

今、彼の指が作り出しているのは、滑らかな左右対称の器ではない。少し歪み、表面には誠の荒れた指紋が刻まれた、無骨な「居場所」だった。泥だらけの誠の顔に、一筋の涙が伝わり、それは回転する土の一部となって消えていった。

誠は、自分の汚れた掌を見つめた。乾き始めた土が、皮膚の皺に沿って白くひび割れている。

光希は意を決し、翠の部屋を訪ねた。

「翠さん。あなたは、この工房を『逃げの檻』だと言った。それは、たぶん正しい」

翠は、光希が自分の痛みを理解しようとしていることに、驚きと戸惑いを覚えた。

「でも…」光希は続けた。「私にとって、ここは、誰にも迷惑をかけずに、息をしてもいい場所でした。この工房の存在が、私に『表現』という、新しい生き方を教えてくれた」

光希は、三姉妹が抱えるそれぞれの苦しみ（家出、ジェンダー、嫌悪）が、結局は、「自分のままで、ここにいていいのか」という、彼自身の問いと同じだと感じた。

光希は、翠に茜のSNSを見せた。そこには、茜が変名で綴っている「孤独な逃亡者」というタイトルの詩が並んでいた。

「茜姉さんは、家出という『行動』を、『言葉』という表現に変えていたのね…」翠は、初めて姉の「逃走」の真の理由を知った。

光希は、翠に言った。「三姉妹の皆さんは、親の『逸脱』という環境から、それぞれ独自の『表現』を生み出している。それは、この家が、檻ではなく、出発点だったという証拠です」

翠の心の中で、工房『土の音』の記憶は、静かに、そして確実に、「嫌悪の檻」から「表現の原点」へと、形を変え始めていた。

終章：新しい絆と「土の音」の再定義

1. 沈黙の共犯の檻の崩壊

三姉妹の衝突と、誠が自分の作品を破壊する姿を見た玲子は、ついに「沈黙の共犯の檻」を破ることを決意した。

玲子は、三姉妹全員に、ビデオメッセージを送った。そこには、いつもの穏やかな笑顔はなかった。

「茜、碧、翠。お母さんは、あなたたちの苦しみに気づいていた。いじめや偏見に晒されていることも、知っていた。でも、お父さんの静かな誇り、そして世間から逃れて築いたこの『土の音』の平和を守るために、私は沈黙を選んだ。それが、あなたの母としての最大の罪だった。本当に、申し訳なかった」

玲子の言葉は、彼女が長年抱えてきた「世間体への恐れ」と「母としての役割」との葛藤を、すべて露わにした。三姉妹は、遠く離れた場所で、母の涙に打たれ、親が自分たちと同様に、透明な檻の中で苦しんでいたことを知る。

2. 誠の新たな決意

玲子のメッセージを聞き、娘たちの苦しみを改めて噛みしめた誠は、既にろくろに向き合っていた。昨日の破壊衝動は消え、荒れた指が新しい粘土を捏ねる。指先に伝わる土の感触は、もう傲慢な「誇り」の手応えではない。

土は誠の迷いを吸い取り、娘たちの怒りや玲子の沈黙、光希の孤独、それらすべてを泥の中に練り込み、誠は再び、形を与えていく。

今、彼の指が作り出しているのは、滑らかな左右対称の器ではない。少し歪み、表面には誠の荒れた指紋が刻まれた、娘たちの痛みを内包した無骨な「居場所」だった。彼は、この作品を、自分の芸術ではなく、娘たちの「表現」の出発点を支えるものになることを、静かに誓っていた。

3. 翠の決断と「居場所」の再定義

翠は、母のメッセージを見て、泣き崩れた。

「逃げているのは、私だけじゃなかった。みんな、それぞれ闘っていたのね…」

翠は、自分の居場所（夫との関係）を再構築するために、夫と正直に向き合うことを決意する。彼女は、工房を出る前に、光希と誠に語りかけた。

「お父さん、お母さん。この『土の音』は、逃げの場所なんかじゃなかった。これは、私たち三姉妹が、自分の表現と生き方を見つけ、家を出るための出発点だったのよ」

彼女は、自分の体験した「偏見と孤独」をテーマに、光希の映像とコラボレーションした「言葉の表現」を始めることを決意する。

4. 灯りの詩

佐々木家は、それぞれの「逸脱者の檻」を家族内で共有し、乗り越えた。工房『土の音』は、親の芸術の場から、「家族全員が、過去の痛みを持ち寄り、新たな表現を見つける場」へと再定義された。

光希は、三姉妹の波乱万丈な物語を、結と共に、新しいドキュメンタリーの題材として記録し始める。彼の表現は、もう「迷惑をかけない」ための隠された行為ではない。それは、他者の痛みと共鳴し、連鎖していく「生きた声」となった。

三姉妹が歩んだ道は、私たちに語りかける。透明な檻は、消えないかもしれない。しかし、それを「逃げの場所」ではなく、「表現の出発点」と定義し直す勇気が、次の世代へ希望を繋ぐ。

（物語 完）

登場人物紹介

氏名	立場	概要	抱えていた「透明な檻」
佐々木 誠 (まこと)	父 (陶芸家)	地域の規範に背き、駆け落ちの末に工房『土の音』を構えた。自分の芸術への誇りが、家族を苦しめたのではないかと葛藤する。	表現の価値と家族の犠牲の檻
佐々木 玲子 (れいこ)	母 (編み物作家)	誠の生き方を支え、娘たちの苦しみに気づきながら沈黙した罪悪感に囚われている。	沈黙の共犯の檻
佐々木 茜 (あかね)	長女 (30代)	親への反発心から家出を繰り返した。現在は東京で自立。逃走の過去を、密かに詩という形で表現している。	親の生き方への反発と逃走の檻
佐々木 碧 (あおい)	次女 (20代後半)	親の自由な姿勢を肯定的に捉えていたが、幼少期にジェンダーの偏見に晒された経験を持つ。「強く」あることを自らに強いる。	ジェンダー規範の檻
佐々木 翠 (みどり)	三女 (20代前半)	夫との関係に悩み、実家に避難。親の工房を「世間から隠れるための檻」として最も嫌悪し、葛藤を露わにする。	親の理想と居場所への嫌悪の檻
藤森 光希 (みつぎ)	主人公 (ひきこもり経験者)	佐々木工房を「居場所」として見出し、映像で表現を始めた。翠の言葉に、かつての自分の痛みを重ねる。	自分の存在の肯定と沈黙の檻

あとがき

『透明な檻の中で5』～逸脱者の家族に降りかかる「連帯責任の檻」～をお読みいただき、誠にありがとうございます。

この物語で私たちが描きたかったのは、「居場所」は親が与えるものではなく、子が自らの意志と「表現」によって獲得していくものだという真実です。親が築いた「居場所」は、子供にとっての「出発点」であり、時には「乗り越えるべき壁」でもあります。本作では、その両義性を描きました。親の逸脱を「連帯責任」として背負わされた子供たちが、それを「自分の表現」へと変換したとき、檻は初めて自由への扉へと変わります。

特に、母・玲子が長年の「沈黙の共犯の檻」を破り、娘たちに謝罪する場面は、シリーズが問い続ける「言葉を尽くすことの困難さ」と「共感の力」を象徴しています。

透明な檻は、外から壊すのが難しいだけでなく、内側にいる人間関係のしがらみや過去の罪悪感によって、最も強固なものとなるのかもしれない。しかし、光希がそうであったように、また佐々木三姉妹がそうであったように、その壁を突き破る力は、他者を恐れることなく、自分の言葉と感情で「私はここにいる」と自己を肯定する勇気に他なりません。

この物語が、今、それぞれの「檻」の中で苦しんでいる皆様の心に、小さな灯火をともすことを願っています。

透明な檻の中で、あなたの問いは、まだ続いていますか？

令和8年立夏

KHJ 岡山きびの会 “ふじさん”